

「新型戦闘機G20の導入は決定的。今更ごめんなさいはできねえよな、猪狩^{いかり}防衛大臣閣下。八菱^{やぶし}商事が推してるG20が通らないとなれば、党三役も見えてるあんたとしちゃ、今後の政治資金に差し支える。未来の総理大臣にやあ、ちよいと重いダメージじゃねえか？」

応接セットの二人掛けソファに両手を広げて悠々座る少女に向かって、サングラス姿の初老の男は自分のデスクの上で手を組んで口元を隠していた。

猪狩は与党の民自党大臣経験者の中で最も若手であ

り、総理総裁の目もあると噂される議員である。それが成人もしていない少女に手玉に取られるなど、あつてはならないことだった。

「……要求はなんだ」

少女——江藤^{エトウ}リョウコは足を組み直した。

黒髪の中、前髪に赤いメッシュが一房垂れて、猫耳のようにも見える赤いリボンが後頭部から飛び出している。黒スーツに赤ネクタイ、脱いだ赤いコートはソファのとなりに掛けられていて、裾はボロボロだった。

「要求つつうと色々問題あんだろ。あたしらは別に何か欲しいわけじゃないんだ。何しろこの口がな、ぱくぱく軽いもんだから困ってんだよ。あたしらが持つてる、G20にまつわる裏金のやり取りにかかるデータを引き取ってもらいたい。そんだけだ」

「引き取り方法は？」

「USBのサーバアクセス用の物理キーを引き渡す。その紙で渡したデータの原本がサーバに入ってる。印刷履歴、コピー改ざん履歴は他にはないのは保証する。

ただこの物理キーつてのが用意すんのに手間がかかったんだ。そうなるとなかなか手を離したくなくなっちゃう。渋沢栄一のオッサンのツラが二万人集まったところを見たら、キーを握る指がゆるゆるになっちゃうかもな。そうになったら、お互い手を離そうぜ。そしたらうまくいくだろう」

それはシンプルな脅迫であった。

しかし猪狩にとってはクリティカルな情報の釣瓶打ちと言ったところで、とても強気には出られないだろう。悩んでいるのがその証拠だ。

『ねー。四ツ谷駅近くにさあ、マグロのカブト焼き食べさせてくれるところあるんだって。あーしさあ、マグロ一匹って一回でいいからチャレンジしたいんだよねえ。アオちゃんどう思う?』

脳内の同居人の一人——衣笠^{きんがさ}ミオがのんきにそんなことを切り出した。

『ミオ、ちょっと黙ってろよ。大体マグロの種類にもよるだろ。あとリョウコ、どうせ選択肢なんてないん

だ。少し引いてやれ』

同じく脳内の同居人・山本^{やまもと}アオイが冷静にそうアドバイスする。

「猪狩大臣。じゃあこうしようぜ。人を集めるのも時間がかかんだろ? このあたしの握力も、一週間が限界つてところだ。最悪、どつかのマスコミの本社前とかですると落ちちまうかもしれない。連絡は一回きりだが、渡した紙にあるアカウントに送ってこい。言つとくけど、電子戦^{シギント}を仕掛けてきたらその時点で不思議な力が働いて、生データが世界中に発信されるからな。『三つ首』がフカシを言わねえって噂くらい、聞いてんだろ」

リョウコ、アオイ、ミオの三人は理由あつて一つの体に合体している。

理由を話すと長くなるため省略するが、消費カロリーが単純に三倍になるため、とにかくなんでもやって金を稼ぎ、食わねばならない。三つの顔を持つ強請^{ゆすり}屋『三つ首』の前では、誰しも平等だ。総理候補だろ

うがなんだろうが、食いつくネタさえあれば単なるエサにしか過ぎない。

「……なぜ現金なんだ。送金はできないのか」

「お断りだね。情報社会ナメんなよオッサン。あんたもあたしよりもリスクを負うように現実でやりとりするほうが、結局は一番リスク管理できんだよ。答えを聞いてねえな。言っとくが、こいつは決定事項だ。破滅するか踏みとどまるか——イエスかノーで答えてもらおう」

「わかった。答えはイエスだ。愚問をわびる」

猪狩は意外にも素直にそう応じた。リョウコは素直すぎるのが少し気に食わなかったが、席を立つことにした。

「じゃ、一週間後までに連絡待つてる。あんたが素直で賢い大臣閣下であることを期待するよ」

△

一週間後。指定された東京ドーム前広場にて。

今日は野球もプロレスもコンサートもないので、人もまばらで静かな平日夜八時である。

リョウコは近くのレストランでテイクアウトしたタコスとナチョチーズを二セット広げ、ぺろりと平らげていた。この程度はおやつである。

『お前にしては食事が少ないな。どうした?』

リョウコはどこか浮かない顔であった。うまくいきすぎている。

「いや別に。何ってわけじゃねえが」

『だいたいさつきからミオも静かなんだよ。どうしたんだ?』

ミオの意識が寝ているわけでもない。むしろどこか緊張したような感じである。彼女はうんと悩んだ様子だったが、静かに切り出した。

『お腹空かないんだよね』

人間の三大欲求のうち〈食欲〉が突出しているミオにとって、お腹が空かないというのは一大事である。

つまり、食欲より優先されるもの——《生存本能》が刺激されていることを意味する。

「マジかよ」

『……何かあるな。リョウコ、警戒しろ』

白色のワゴン車が広場に滑り込んで来たのは、ほぼ同時刻のことであった。数メートル先のリョウコにびたりと合わせるようにスライドドアが自動的に開くと、そこに座っている女が目に入った。

ぐったりしている女である。赤毛のボブカットに青白い肌、目の下の隈は黒を通り越して紫色だ。右耳に装着したクリップタイプのイヤホンから、マイクが口元に向かって伸びている。

介護用と思われるスライド式の椅子が外へ滑り出し、彼女の足を地につけた。首には細いチューブが繋がっており、着ているのは灰色のシンプルなスーツだ。

青い液体がするするとチューブを下り、彼女に到達すると、目の色に炎が宿り——まるで壊れたおもちゃに電池が入ったかのように跳ね起きた。

「はい！ 現着しました！」

やけに目の輝きと声の大きさが気になる女だった。彼女はリョウコを見つけると、若干不安になる足取りでこちらに近づいてくる。その手には巨大なアタッシェケースが握られている。

「なあ、アレ……」

『害意があるのか無いのかわからん』

『ヤバそうなのは確かだよね……』

三人は意見を一致させ、とりあえず制止することにした。

「おい！ てめえが使いか？」

「そういうあなたは三つ首さんでいらつしやいますか！ 防衛省備品管理課別室の千代田あかりです！」

千代田と名乗る異様な目をしたスーツの女は、巨大なケースを軽々と目の前まで持ち上げて見せ、それを地面に置いた。石のパネルがバキバキとせんべいみたいに割れる。

「こちら、お約束のものです！ 例のもの、お引渡し